

静岡大学演習林でのインターンシップの取り組みと報告

著者	宇佐美 敦
雑誌名	技術報告
巻	22
ページ	25-28
発行年	2017-03-10
出版者	静岡大学技術部
URL	http://doi.org/10.14945/00010246

静岡大学演習林でのインターンシップの取り組みと報告

宇佐美敦

技術部フィールド支援部門 南アルプスフィールド

1. はじめに

静岡大学の天竜フィールドと南アルプスフィールドでは、2013年から毎年全国各地の大学生を対象に、演習林の技術職員の業務体験を中心としたインターンシッププログラムを実施している。開始から4年間の経過し、一定の成果や課題が得られたので、これまでの取り組みの内容や今後の活動についての展望などを併せて報告する。

2. 本インターンシッププログラムの目的

本プログラムの名称は「森林保全管理業務インターンシップ」である。このインターンシップの目的は、森林に関する通常の学生実習とは異なって森林管理に関し、より実践的な経験を学生たちの進路や研究活動に活かしてもらうことである。

3. 期間と場所

毎年8～9月頃、4泊5日の日程で実施する。

開催場所は、静岡大学農学部附属フィールドセンターの天竜フィールドと南アルプスフィールド、そして本プログラムに協力をお願いしている天竜地域の林業会社である。

学生たちの宿泊場所には天竜フィールドの宿泊施設を利用する。

4. 方法

i. 参加者の募集

参加者の募集や開催までのスケジュールについて、以下の表1に示した。準備に関しては、演習林所属の教員と技術職員が連携して進める。技術職員はプログラム内容や行程の企画や参加学生の対応など、プログラム開催中の現場に関わることを主に担い、教員は広報用のポスターや配布物の製作や各大学の事務窓口とのやりとりなど、事務的な役割を担っている。

表1 開催までのスケジュール

時期	項目
2～4月上旬	プログラム・日程の決定
3～4月上旬	掲示用ポスターや募集要項の作成
4月	協力企業と受け入れに関する交渉
5～6月	実施要項や配布資料の作成
5月下旬～	参加者募集
6～7月	参加者の決定と調整

ii. 実施項目

a. 天竜フィールド

天竜フィールドでは、スギ・ヒノキの人工林管理を中心とした業務に従事する。具体的には人工林の資源量調査、下刈り・間伐等の林内作業やそれに関わる機器の整備を行う。機械器具類点検整備は、林内作業で利用するバックホウなどの重機の法令点検や、チェーンソーの整備などを行う。特にチェーンソーは分解・清掃・整備・試運転のすべての工程を行う。資源量調査は、人工林のスギ・ヒノキの材積の算出をするための調査で、直径と樹高を測定する。林内作業では、間伐が必要であるものの比較的サイズの小さい人工林で実際に間伐作業を行う（図1）。



図1 間伐作業

b. 南アルプスフィールド

南アルプスフィールドでは、実習や調査研究用の歩道や登山道などの歩道点検整備、防獣柵の管理、生態系モニタリング試験地調査などに従事する。防獣柵管理では、必要な資材の運搬や、破損箇所修復やメンテナンスを行う。南アルプスフィールドでは年々森林へのシカの食害ダメージが深刻化しているため、防鹿柵等の整備に力を注いでいる（図2，図3）。



図2 防鹿柵補修



図3 防鹿柵資材運搬



図4 実生調査

また、数十年に一度と言われるササの一斉開花と一斉枯死が起こった調査地で、そのイベントに伴う生態系の変化を記録するために様々なサンプリングを行っている。実生調査という自然に発芽した植物の苗の種類や数を記録する調査などを行う（図4）。

c. 企業訪問

企業訪問では、様々な林業の現場見学を中心とし、案内役を各企業の担当者をお願いしている。学生の引率監督のため、静岡大学からも職員が同行する。訪問先の企業では、実際の現場に出向いて様々な作業と働いている人の様子を見学する。また集材機械のラジコン操作など、簡単な体験などもできるようにお願いしている（図5）。そして学生たちとの意見交換や質疑応答にも対応してもらい、業界への興味や知識を深めてもらえるような時間も確保している。



図5 集材作業の見学・体験

iii. 参加者データの集計

参加者の所属大学の地理的・専門分野の傾向や、本プログラムにどのようなことを期待して参加したのかを調べる必要がある。そこで、参加者の所属に関する記録と、プログラム終了後のアンケート調査を行った。

5. 結果と考察

i. 参加状況

過去4年間の参加状況の推移を図6に示す。2013年および2014年は、3名定員で1回/年の開催である。2015年は定員を4名に増やし、2回/年の開催に変更した。そして、2016年は定員6名、2回/年の開催に変更した。

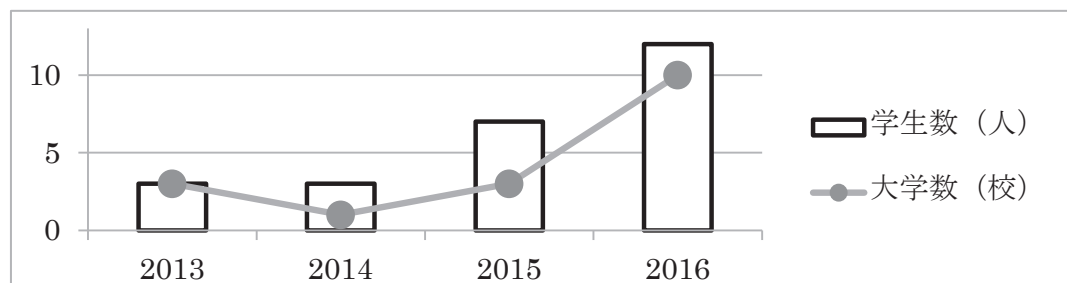


図6 過去4年間の参加状況

初回の2013年と2014年は、本プログラムの需要が未知数であったため、それぞれ1回のみ開催で、先着定員3名ということで募集を行った。2013年は3大学からそれぞれ1名ずつの応募で予定通り完了したが、2014年には先着3名のところ同じ大学から3名同時に申し込みがあり、そ

れ以降の申込みは全て断るという状況に陥った。申し込みを断った人数は5名以上にのぼり、各大学でアナウンス時期のタイミングが違うため、このような少人数の募集では純粋な先着順のままでは参加を希望する学生にとって不公平な状況にあるということがわかった。そこで、2015年以降、募集要項に先着順に受付けるが応募者多数の場合は参加者の調整をする場合があるという記載を加えた。また、参加大学数の増加については、広報用ポスターのデザインの工夫や配布校を増やしたことが影響していると考えられた。

ii. アンケートの結果

アンケートの結果としてもっとも多かった回答が、「林内作業をもっと体験してみたかった」「森林生態に関してもっと勉強したかった」の二つであった。そこで、現在の産業と学術の総合的なプログラムから、人工林管理や企業見学を中心とした産業コースと、天然林管理や試験調査を中心とした学術コースという二つのプログラムを別個に開催するという方法が考えられた。しかしながら、演習林の技術職員は総合的なプログラムで体験できる全ての業務に携わっているため、この手法は根本的なコンセプトに反するという問題点がある。

6. まとめ

本インターシップの取り組みは、小規模ながら年々参加者を増やすなど着実に実績が上昇してきた。しかしプログラムの性格上、無尽蔵に定員を増やしていくことは難しいため、適切な参加人数を見極めることが重要である。また、広報活動に関して、関係各所との連携を強化継続していくことも必要不可欠である。そして、森林に関する総合的なプログラムとして、実施項目に創意工夫を加えた魅力的なものになるよう、改良の努力を続けていくことが重要だと考えられる。